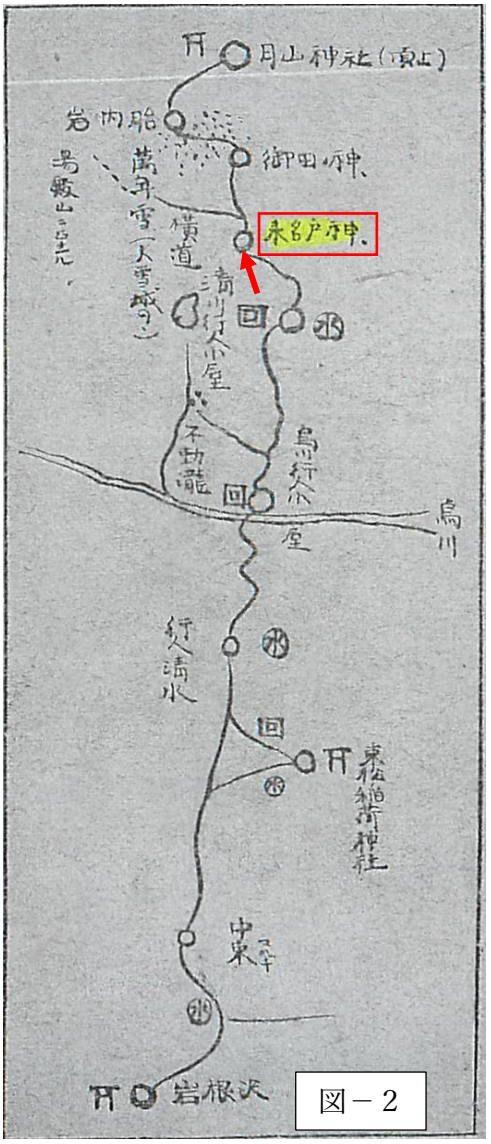
第２巻　第６章　来名戸神

原田一男著「月山登山案内」から図(表)－1・2に抜粋する。このことは丸山茂著「岩根澤の面影」にも記載されているが、この地名（名称）以外は何も記載されていない。

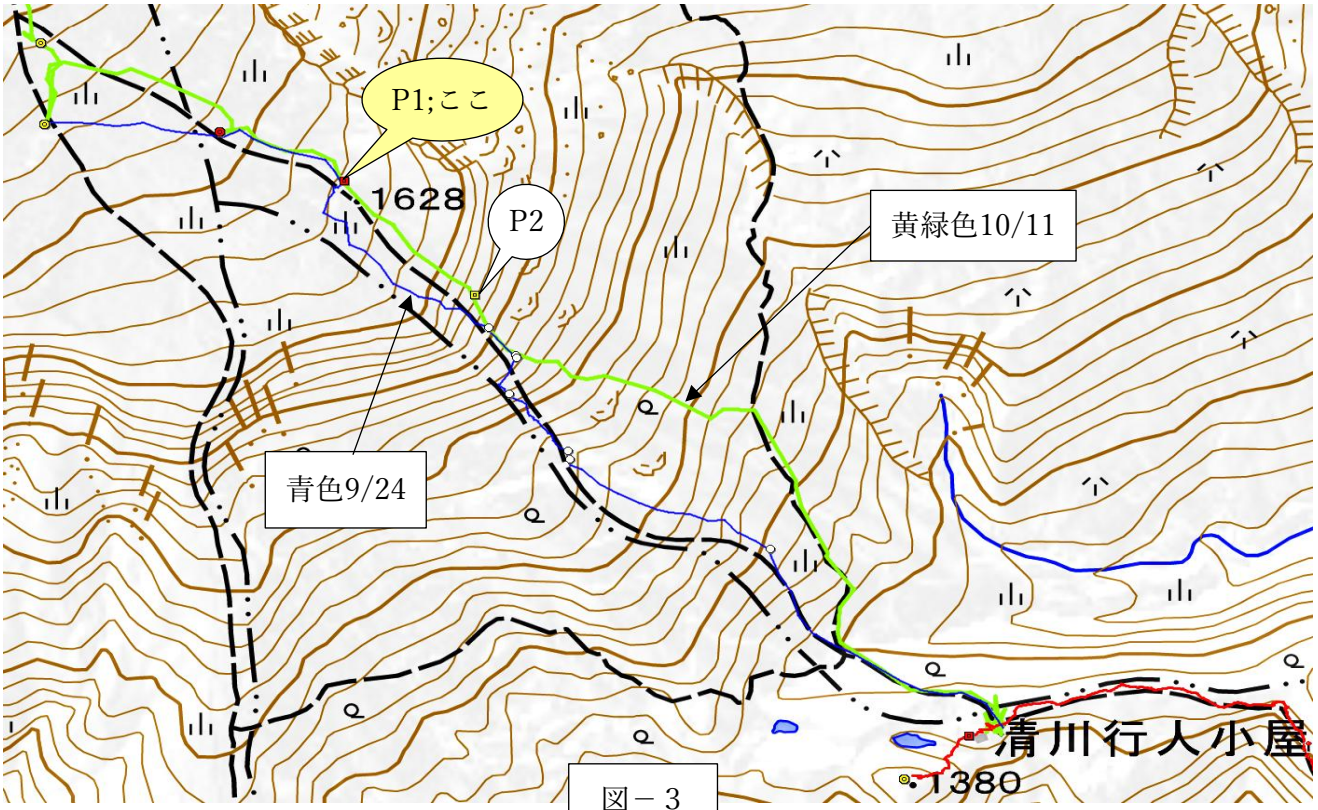
図(表)－１
・・・「手盡し」（急坂）に会う、急坂で手を盡して上らなければならぬのでこの名が起こった。・・・上り詰めて平坦な所に「**来名戸神**（くなどかみ）」の安置せられている処に出る。神霊の気分になって頂上へと向かう途中に「御田の神」の安置されている草木帯に出る。この處から灌木帯が過ぎて高山のお花畠の草木帯だ。この處で五穀豊穣を祈って頂上へと進むと途中本道寺からの登山口（高清水通り）に会う。・・・



図－２

そこで、現在における「来名戸神」の場所を特定・探査したく2023(R5)年9月24日（日）宮林良幸と二人で、前泊の清川行人小屋から清川古道に入った、繁茂の藪漕ぎのために旧道を少し南にずれて、草付きに出た所で、約35m北方に視線をやった時に気付いた盛り土に異様さを直感し調査に入ったものである。

図－3のとおりの『**P1;ここ**』の場所である。全体状況は図(表)－4a、墓石の刻字碑文は同図bのとおりである。今存命の人に



図－３

とっては新発見に等しいと思っている。長年に渡ってこんな高所に地蔵菩薩像と結果して墓石３体が安置されて来たのだ、像の三分の一は土中に埋もれて倒れ掛かるように傾き、墓石は体の三分の二が地中に埋まっていた。整理すると、図(表)－４中墓石の上２体は9月24日(日）に、下１体「・・幼道**女（童女）**」は直後の同年10月11日(水)～10月12日(木)、片倉忠幸・松田秀孝・大沼香は再調査に入って地中から掘起したものである。それも、**３体に女性戒名が刻字されていることを突き止めた**。なお、童女の墓石は2024(R6)年11月14日（木）清川行人小屋前からも発掘した。

当地は小高い丘に成っており、明らかにに周辺地勢とは異なる、人工的な匂いがした。墓、つまり、古墳（墳墓）ではないかと思う、そこで、「来名戸古墳」とも称することにしている。今となっては藪漕ぎをしなければならないこの高地（標高約1,630m）に、このような古墳があるとはまったくの予想外で驚愕した。

全景（周囲より小高い、人工的盛り土）

(六)地蔵菩薩　　膝幅38cm×胸幅23cm×
高さ39cm×奥行25cm

像と墓石３体
（像に刻字なし）

図(表)－４a

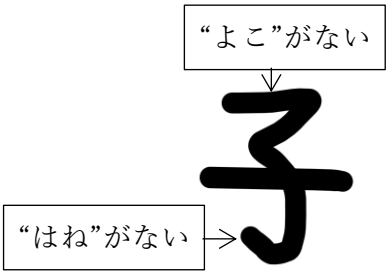
なお、道の状態のことだが、前記図－３において、P1～P2間には、地形図上のとおりに道が明瞭に残っているものの、急坂地形の中に直線的に造っており、長年の川流れによって、所によっては人の背丈ほどの深さに掘れてしまっている。それ故に、太くはないが両側から雑木や笹竹が被さって歩き難い状況にあり、２回に亘る調査時は道を外して傍を藪漕ぎした。

文政七(1824)八月十八日　仙台伊具郡
柱心宗香信士
春水妙杲信女
弘化二(1845)二月二日　藤田村　初吉

仙台□□名取郡鈴□町
嘉永□□年（西暦1848～54年）
菊庭露光信女
九月四日　喜太郎
□□

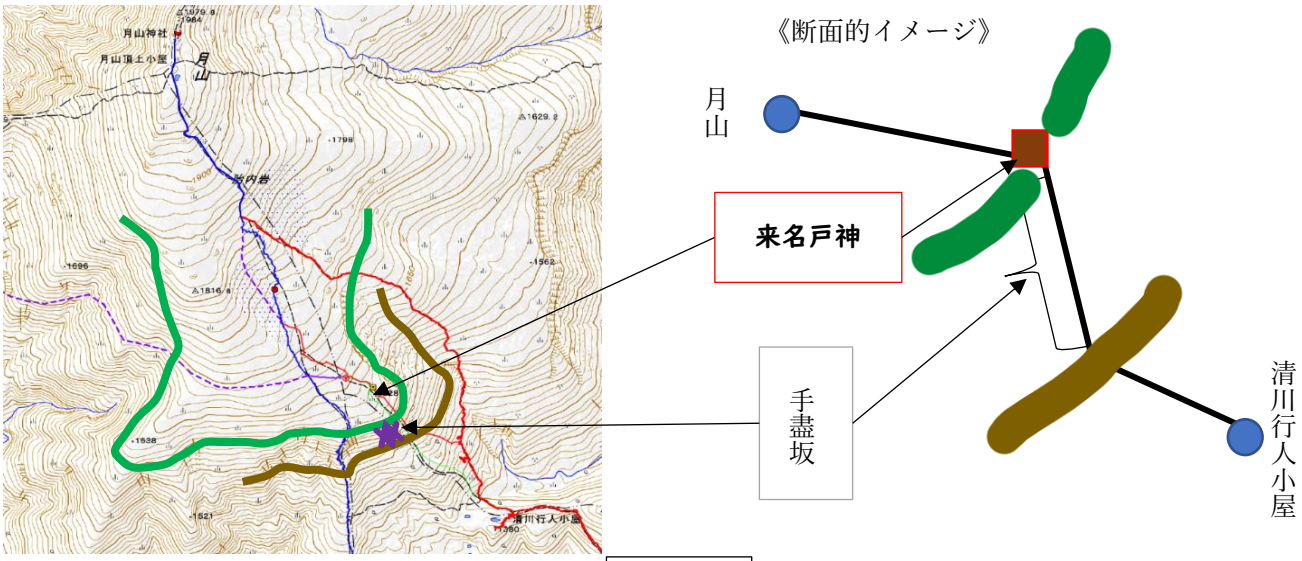
②右側面に「山先達　長甚坊」　　①

③「・・・幼道女」のように読めたが？　他は摩滅して判読不可　（道は童であろう）
　現物を一見、“女”の所が“子”にも見えたが、直視する中では以下により“女”だろうと見た。この時代の童女とは７歳以上15歳未満か。



図(表)－４ｂ

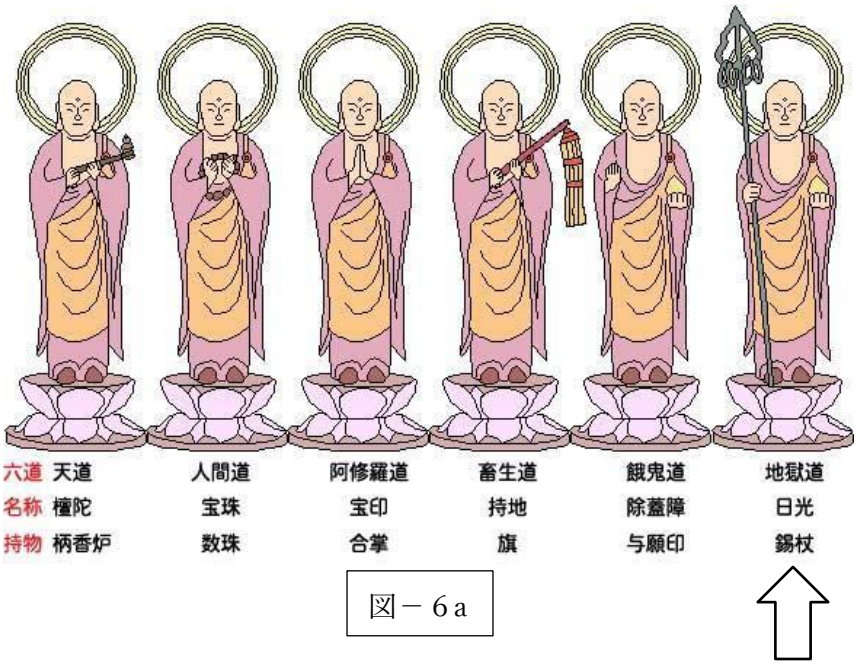
１）さて、そもそも、先人はなぜこの地点を来名戸神として指定（設定）しはたのかを考察する。「来名戸」という語源は、ネットコトバンクによれば「日本書紀」にみえる神、「くなど」とは「来てはならない所」の意味、道の分岐点や村境などで悪霊の侵入をふせぐ神であり、道祖神の原型とされる。ウィキペディア等によれば、「来名戸神」とは古より牛馬守護の神、豊穣の神としてはもとより、禊、魔除け、厄除け、道中安全の神、疫病・災害などを齎す悪神・悪霊の集落侵入撃退の神であるという。月山の地形・地理構成は図－５のとおり。境界（緑線）より上は森林限界を越えた草付き、その下方は雑木藪の急坂崖状（断崖絶壁状）になっている。地元では古来、地面に手を盡(つ)いて這いつくばる状態で登らなければならないことから、このバンドを古来「手盡坂(てづくしざか)」と称して来た。ここを登って来た道者からみれば、喘ぎながら死に物狂いで登り切った途端に傾斜が緩くなり、見晴らしが効くようになったこの場所は、別世界に飛び込んだ気分になったであろう。今もまさにそのとおりである。それらをみんな合わせて「来名戸」の聖地(聖俗結界地)に来た雰囲気の所である。要は境の神、道祖神の仲間－「道股(ちまた)」の神であろうが、現地は地形的には「境・堺」に相応しい地点（ライン上）にある。



図－５

２）次の、この石像は何なのか？　像の像容（姿）の特徴は、左手に宝珠らしきものを、右手に錫杖・剣らしきもの（本像では穴があるだけ、持ち物は腐食したのか？）を持っている状態にある。そこで、そのような像は何なのか、墓石を合わせてここに安置せしめた意図は何なのだろうか？　複数の方から、「地蔵菩薩ではないか？」というヒントを貰った。(私の現地直感は薬師如来であったが、まったくの外れであった。)

左右両手の持ち物に注視しつつ「高野山真言宗　やすらか庵」のＨＰを見ていたら六地蔵の図－６aに出会った。また、同図b　はネットより円成寺地蔵石仏（奈良県奈良市忍辱山町）である。いずれにして



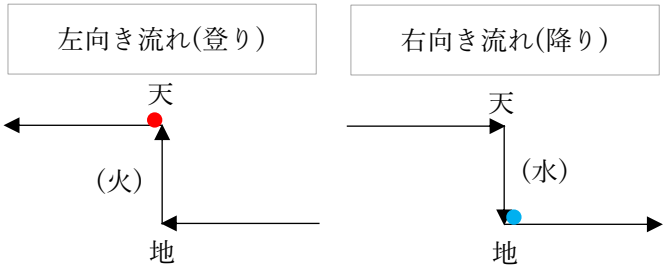
図－６a

図－６b

も図－５a 右端の「地獄道」対応と酷似――立像と坐像の違いはある――している。法城山護国寺（長野県伊那市）のＨＰには「**左手に宝珠を持ち、右手に錫丈を持つ**ものは“六地蔵［地獄道］守護の大定智悲地蔵”である、錫丈を持って(※)六道を巡り歩き、苦しんでいる人を救う仕事をしている。」とある。端的には来世・あの世は、極楽と地獄という対極的な世界が存在するという信仰が基層にあるのだろう。

※仏教では「六道輪廻」の思想があって、人間は死後、生前の行いに従い“地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上の各世界”をぐるぐる回りながら彷徨い続けるとされる、そこから抜け出させる（解脱させる）ための手助けが遺族の先祖供養とされている。何だ死んだ人に対する供養か、ひいては寺に対する布施を強要する一策ではないのかなどの曲解が生ずる恐れがあることからは、生きている生身の人間にも六道に当て嵌まるという考え方もあるようだ。

ところで、錫丈そのものの姿としては、下は地に向け、上は天を指すように立てて持つ、横にしない。そこに道者の動きを重ねる、登りの場合は上昇指向の『火』の勢いに同化し、降りの場合は下降指向の『水』の勢いに同化し、その変曲点はこの「来名戸神」の地点なのだ。 仏陀入滅後、56億7千万年後に兜率天(とそつてん)から弥勒菩薩が救世の仏としてこの世に降臨・出現されるという弥勒信仰がある。弘法大師は、死の４か月前の11月15日に、弟子達を集めて「吾れ、閉眼ののち、必ず兜卒陀天に生じ、弥勒菩薩の御前に侍るべし。五十六億余ののち必ず慈尊の御供して下生しまい祇候（しこう）」と述べ、自身を弥勒菩薩の下生に重ねた。ここから真言宗開祖の空海こと弘法大師は弥勒菩薩とも重ねられて信仰されている。

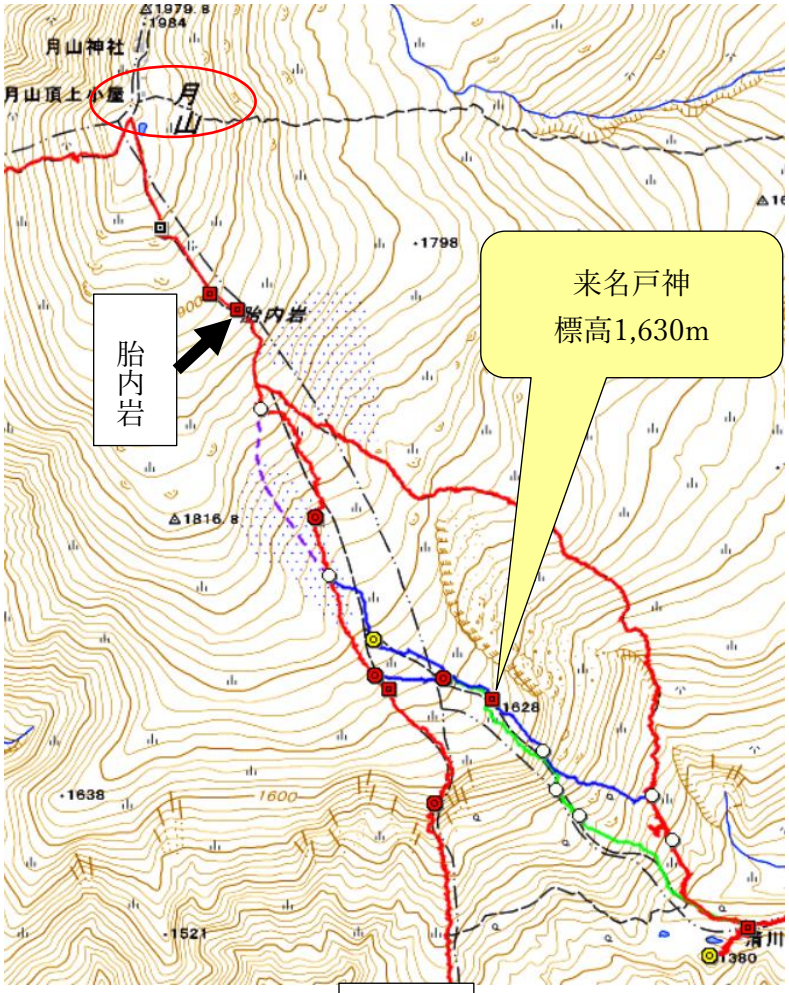


図－７

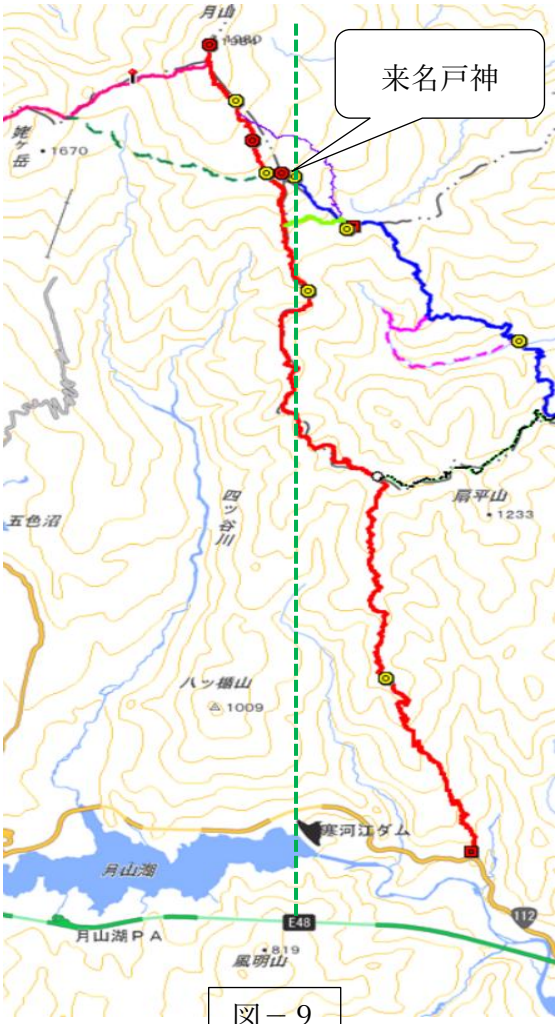
３）果たして現地のものはそれらの役割を期待して企図したものだろうか？　あらためての問題意識！このような場所に女性（の戒名）が３人も登場するが、供養碑とかの呼称・分類は何であれ、これは何を意味するのだろうか？　（女人禁制問題に関係すると直感し別記する。）図－８のとおりに、これより約1.3km月山よりに体内岩がある、古来、山中他界信仰に基づき、月山には祖霊神が集まると信仰され、具体的には体内岩に夥しい数の供養碑・慰霊碑・墓石が奉納・集積されている。そこに埋設・安置しないでここに当てたのである。ここに安置した地蔵菩薩は六地蔵中［地獄道］対応の仏様であることからして、何か、生前、不良・悪事を働いた故人を、遺族が慮って、胎内岩には混ざらせないで少し離れたこの地を選択したのかもしれない、あるいは、それは遺言であったのかもしれないが、考え過ぎか。

ところで、胎内岩の胎内とは「子が孕まれる母の腹の中」を指すが、子＝誕生なのに、なぜ反対様相の墓＝死滅なのか？　いわば、子⇄墓、誕生⇄死滅、相反する事象の同居の地なのであるが、これを許す理由は何か？　一つ目は日本人の根底にある理屈抜きの輪廻転生思想にあろう。二つ目は胎児に曰くいわば半死半生の状態、死と生を繋ぐ、生と死を繋ぐ「中今」思想――この『今』は過ぎた過去へと、まだ来ぬ未来への発散分岐点であると同時に、過去と未来を収斂・合一点でもある、とする見方――になろうか。端的すれば「死＝生」なのである、これは矛盾・撞着ではない、”再生・蘇る”の意味合いである。陰陽二元同居・混在の両義性思想可視化の一面である。　なお、地蔵菩薩本願経・閻浮（えんぶ）衆生業感品第四において、釈迦（仏陀）は「地蔵菩薩の前身が女性である」と明言しているという。ならばしたがって、女性戒名墓石(霊魂)と地蔵菩薩の同座は至極当然となる。

４）地蔵菩薩の**向きに注目**する。現地でコンパスを当てると、図－７のとおり同像は**ほぼ真南（やや西より）を向いて安置されている**。その視線の先を追うと今は寒河江ダムの堰堤周辺に当る、水没した昔の集落を知る由もないが、いずれにしても、そこには大規模集落があったとは思われない。すると、限定された一定範囲の里の人々だけの安寧を見守る願いを込めたというよりも、もっと広い意味合いを込めたものと推察するに至る。



図－８



図－９

特に留意すべき点は、第４章に別記した御所王子稲荷神社においては、「湯殿山遥拝」を強く意識した配置という視点から説明したが、ここにおけるこの地蔵菩薩は、月山や湯殿山に向いていないことである。

その謎解きに「**北を背に南面す**」というそのキーワードが浮かんだ。その説明は「第六巻－（１）『北を背に南面す』」に記述したことからそちらを参照されたい。

５）図－８、石上善応著「弥勒菩薩」（集英社）にある興味深い一説を取り上げる。「・・・ミロクの世界が登場はしても、五十六億七千万年も待つことができなかった人々は、阿弥陀を頼み、地蔵菩薩にすがる過去の事実を引き出しても来ます。未来仏ミロクにしても、人間の能力や善悪を問わず、弥勒を念じ、弥勒のみ名を唱えることになって、等しく救済されることになり、阿弥陀の世界とさして変わらないのであるという印象さえ抱かせます。」　阿弥陀仏は月山神の本地仏である、仏となった如来、その手前は修行中の菩薩などという仏教上の学問的定義はともかくとして、一般民衆、庶民目線からすれば、神仏混交、佛々混交、神々混交は当たり前であって、法華経でいう久遠実成無作の本佛、大日如来の尊格（宇宙を仏格化した根本仏）などに鑑みては、まさにシンクレティズム（諸教混交）世界観なのであり、単純化すれば「大日如来≅弘法大師（空海）≅弥勒菩薩」である。なお、「≅」同値、同価、同相意味である。

ここ「来名戸神」はそのような状況を包含した聖地と見なして来た場所なのであろう。

********** こ の 段 の ま と め **********

以上のことを全部頭に入れて構想した最初の人がいて、聖俗結界と見立てるに相応しい「境・堺」の地に「来名戸神」を祀った、あるいは、「来名戸神」が座(おわ)す特別な霊地と見做したことが伝承されて来た中において、江戸後期のこの時代（1800年代）に墓石を安置したということなのか。さらに、別記するが、当地は従来通説の女人禁制点を覆す命題を孕んでいる。

あらためて、そのような地蔵菩薩に込めた思いを推察するに、錫丈を持って六道を巡り歩き、苦しんでいる人を救う仕事をしている、というが如くに、自らの親族縁者や故人の供養のみならず、縁の有る無しに係らず故人みんなの霊魂が「悟り」を得られるよう成仏・冥福を祈りつつ、生きている人達に係る五穀豊穣・子孫繁栄の祈願聖地の印として地蔵菩薩に仮託し、さらに裏基層には太極（太一）の徳を持つ皇祖神を重ねて崇め祀って来たことだろう、逆にそのような徳を潜めたとも言える。ここに何回も行って見たが、とにかく怪しげな冷気を感じる場所である。

なお、地蔵菩薩には何も刻されていないが、先の御所王子稲荷神社のように、安置由緒を刻した別の石碑が周辺に埋まっている可能性はある。また、他にも墓石などの石碑が埋没している可能性はある。

（end）